

「第13回子ども学会議」を終えて

長寿社会の子どもと情報学

— 家族・地域・メディアとつくる子どもの未来 —

大会長 竹林 洋一（静岡大学教授）



第13回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）を2016年10月8日（土）・9日（日）の2日間、静岡県浜松市にある静岡大学浜松キャンパスを会場に、東海地区で初めて開催させていただきました。

大会テーマは、大会を運営する静岡大学情報学部が、コンピュータを活用して人間社会を安心、安全、豊かにするための教育・研究に注力していることから「長寿社会の子どもと情報学 - 家族・地域・メディアとつくる子どもの未来 -」といたしました。

日本の少子高齢化は進展し、平成27年の65歳以上の人口割合は26.7%、14歳以下の人口割合は12.7%となり、世界のトップランナーとして人類未踏の長寿社会に突入しました。大会では、多世代が共に担う諸問題の解決に向けて、「子ども」をキーワードに、インタラクション（相互作用）の科学である「情報学」の視点から諸学問の領域を架橋する学術集会にしたいと考えました。

2日間にわたる子ども学会議では、認知科学の第一人者である安西祐一郎先生の基調講演、認知症ケア技法「ユマニチュード」の考案者であるYves Gineste先生の特別講演に加え、2つの魅力的なシンポジウム、発表者の顔が見えるポスターセッション、手づくりの懇親会、多世代交流をテーマにした市民公開講座を通じて、研究者、実務家、そして市民の皆さんと「専門」の壁を超えて交流し、子どもと家族が安心して暮らせる未来と、子ども学の発展に貢献することを目指しました。その目的は、ほぼ果たせたのではないかと考えております。

この大会は浜松市に後援をいただき、さらに静岡県内の静岡県立大学、静岡文化芸術大学、浜松学院大学、聖隷クリストファー大学、常葉大学、静岡大学、また情報処理学会、人工知能学会、映像情報メディア学会、ヒューマンインタフェース学会にも協賛・後援いただきました。また、ご参加いただいた皆様、ご講演いただいた演者、シンポジスト、座長の先生方をはじめ、多くの方々に多大なご協力をいただきました。実り多い大会になったことを振り返りながら、あらためて心より感謝申し上げます。